

#### ■ 赤武酒造株式会社

##### ◆ 大槌の家も酒蔵もすべて失った

「かーちゃん（奥さんのこと）が、『本当に大丈夫なの？ 本当に大丈夫なの？』って泣くんですよ。『大丈夫、大丈夫だって！』って言うんですけど、私だって考え始めると胃が痛みます。だから、この融資が決まった時は本当にホッとしました。今は、あそこにこんな設備を入れようとか、あれが付かなきゃダメだなとか、あれこれ計画を練っているところです」

震災から1年半が経過した2012年秋、赤武酒造の代表取締役社長、古館秀峰（ふるだて・ひでみね）さんは、故郷の岩手県大槌町から遠く離れた盛岡市のある空き地の前でこう語った。「マイホームだって建てたことなかった人間が、工場を建てようってんですからね」

震災で何もかも失った時、古館さんは120年続いてきた酒蔵を廃業しようと思った。だが、今、古館さんは移り住んだ盛岡で再び立ち上がり、新しい酒蔵と工場を建てようとしている。本人がこの間、意識して作り、今ではすっかりトレードマークになった笑みを顔中に浮かべる。

だが、この間の心中は決して穏やかではなかった。今でもそうだろう。補助金が出たとはいえ、一部は自己資金として出さなければならず、その調達に駆け回らなければならなかった。融資も何とか取り付けたものの、当然、返済しなければならない。大槌町では代々受け継いできた家に住み、マイホームのローンも組んだことはなかった。いきなり背負うことになった桁違いの借金に戸惑っている。

震災以前から会社の金庫番を勤めていた奥さんはどこか無理をしている古館さんの様子を見て「本当に大丈夫？」と聞く。「大丈夫、大丈夫」と古館さんは応える。とにかく進むしかない。もう、後戻りという選択はないからだ。

岩手県の沿岸部、太平洋に伸びる南北の海岸線のちょうど真ん中に位置する町が大槌町だ。宮古市の南隣が山田町だがそのまたひとつ南、釜石の北に位置する町だ。ここ大槌で酒蔵を営み、地元をはじめ、全国に日本酒を送り続けてきたのが赤武酒造だった。

震災当日、会社から避難所へ避難した古館さんは、そこで学校から逃げてきた2人のお嬢さんと会うことができた。奥さんはちょうど両親に会いに実家の神奈川へ出向いており、長男は東京の大学にいた。家族が無事なことにはホッとしたが、大槌の町にはさらに被害が広がろうとしていた。

津波でもみくちやにされた町のあちこちで火の手があがり、一斉に燃え広がり始めた。「消防車もなく、消防団員も何人も流されたという。消すに消せない」（古館さん）。昼夜、燃え続ける自分たちの町を住民は高台から見守ることしかできなかった。

電気は停まり情報は携帯用のラジオしかない。だが、そこから入ってくる情報は大きな町のことばかりだ。自分たちが火災に遭っていることさえ外の人たちは知らないのではないだろうか（実際には大槌町や隣の山田町の火災については単発的な報道はされていた）。古館さんが決心して盛岡に

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県 : 赤武酒造株式会社

向かったのが震災から4~5日経ったころのことだ。幸い母親の自動車が流されずに残り、それにお嬢さん2人を乗せて出かけることにした。

凸凹になった道を慎重に走らせ、盛岡市内に入って最初に向かったのがNHKだ。数日ぶりに携帯がつながったので、そこで急いで奥さんに連絡を入れて3人の無事を伝えた。その後、NHKの職員を連れて再び大槌へ戻り、火災の様子を現地から伝えてもらった。

消化ははかどらず、一部が鎮火しても再び出火することの繰り返しだった。完全に鎮火したのは4月に入ってからだ。震災発生からひと月が経っていた。

やっと町へ出て様子を見ることができる。

「でも脚が動かない。それでも長靴を借りて、道なき道を歩いて行ってみると、何もありませんでした。貯蔵庫の鉄骨は残っていましたが、中身はもう何も……。蔵も流されていました。昔からあった土蔵もすっかりなくなっていました」

酒蔵や会社の事務所が津波に飲み込まれる様は高台から見ていた。だからあきらめはついていたつもりだったが、水が引き、鎮火した後で現実に関自分の目で見た時は呆然とした。辺りは焼け野原そのもので、会社に関係するのは原形をとどめない醸造機械や焼け焦げた貯蔵タンクだけ。後は何も残っていなかった。震災当初、生きていて良かったという気持ちはまぎれもなかったが、その安堵感を台無しにするような大きな不安が襲ってきた。

#### ◆盛岡で再起、仮工場でリキュールの生産を開始

避難所では何をやる気にもなれず、時間だけが過ぎていった。それではいけない。無くしたのばかり考えていても前へは進めない。思い切って盛岡市の親戚を頼ることにした。後から合流した奥さんも加え、親戚の家に家族4人で世話になりながら、仕事を探すのだ。

親戚には快諾を得て実際にその家へ行ってみると、すでに避難してきた人がおり、1軒に20人が暮らす生活が始まった。古館さんは盛岡市のハローワークへ通い始めた。

親戚は構わないと言ってくれるが、気を遣わないわけにはいかない。たまに息抜きをかねて家族で市内のファミレスに向かった。周りではたくさんの家族が賑やかに食事をし、笑い声も聞こえてくる。だが、自分たちは笑うどころか話もせず、黙りこくったまま食べ続けていた。いつもは励まし役に回る奥さんも下を向いたままだ。

「ナイフとフォークの音だけコツコツとするだけ。喋らない、何も会話がな。これがずっと続くのか。そう思うと悔しいって言うか辛いって言うか……。やりきれなかったですね」

震災からひと月以上経った盛岡には、ごく普通の生活が戻っていた。だが、古館さんと家族は当日のショッキングな状態からずっと抜け出せずにいたのだ。

立ち上がるきっかけになったのは、先輩の一言だった。古館さんが盛岡に出てきたことを知った先輩がある日、声をかけてきた。

「前の仕事を辞めて新しい仕事に就くにしても、今までのお客さんに何の連絡もしないのは、お

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県 : 赤武酒造株式会社

前、おかしいぞ。今はこういう状況なのでもうできません。そう話すべきじゃないのか」

ハッとした。「確かにそうだ」と、お客さんのところへ挨拶に回ることにした。だが、酒造りをもう一度、始められるとはとても思えず、状況を報告した後、「これからどうするのか？」と尋ねられても、「酒屋はやっぱり難しい」と答えるしかなかった。「そうか残念だな」。多くの人がそう口にし、それ以上は何も聞かなかったが、中には「できるならばもう一度、あの酒を造って欲しい」「また買うからがんばれ」。そう言ってくれる人がいた。

いわて生協の飯塚明彦理事長もその1人だ。「もし、やる気があるのだったら、いわて生協が全面的にバックアップする。その時は連絡を」。そう言われて、「待っていてくれている人がいるんだ」と改めて思った。「もしかしたらもう一度できるんじゃないか。やってみよう」。震災から2カ月ほど経った時のことだ。

再帰の足がかりは盛岡市内にあった。盛岡市新事業創出センターが、被災事業者のために無償で工場を貸していたのだ。本来は、創業間もない先端技術事業者や、新製品や新技術の事業化を図る経営者——いわゆるベンチャー企業のために廉価に業務用スペースや工場を貸し出す機関だが、特別に被災支援に携わっていた。ここの1棟、平屋の約100坪のスペースを借りてやり直すのだ。

2011年7月、体育館よりひと回り大きなスペースの一角を区切ってデスクを置き、仮事務所を作った。従業員も盛岡市内で新たに募って会社を再開した。残りのスペースが工場だが、さすがに中に酒蔵を造ることはできず、日本酒の製造は無理だった。だが、アルコールと果物などの材料を混合させて造るリキュール類ならできる。

出直すことをお客さん、知人、取引先に知らせると、次々と支援が舞い込んできた。原料を補完する冷凍庫、製品のための冷蔵庫、作業のためのステンレスのデスク、製品を運ぶためのカート類などなど。偶然に手に入れた、余っていたと口では言っていたが、きっと懸命に揃えてくれたに違いなかった。

ひと月後の8月、ついに被災後に初めてのリキュールが完成した。県北部の岩泉町の牛の生乳を使い、岩手県産100%で醸した清酒を加えて濃厚な仕上げにしたのが「リカースイーツミルキーヨーグルト」、同じく県内の葛巻町産ヤマブドウで酸味を生かしながら甘口に仕上げたのが「いわて山ぶどう」、そして「みかん」。色彩も豊かな3種類のリキュールができあがった。

#### ◆本当にやりたかったのは清酒造り

一度はあきらめた酒造りを再開できた。操業再開と「リカースイーツ」シリーズの発売を伝える地元の岩手日報の記事には、「多くの人に助けられた」と、嬉しそうなのは確かだが、堅めの表情の古館さんが掲載されている。

嬉しくないはずはない。だが、古館さんは満足したわけではなかった。リキュールは原料をブレンドすることで作ることはできる。大掛かりな設備も必要はなく、だから仮工場でも可能だった。

だが、酒を造る以上、蔵で清酒を作りたい。それが本音だった。何人もの人から「待っている」

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県 : 赤武酒造株式会社

と言われたのは、赤武酒造の看板商品、清酒「浜娘」のことだったからだ。

酒蔵を造ることはたやすくはない。だが、どうしても作りたい。古館さんは盛岡の酒蔵を回り始めた。酒蔵を借りて、清酒「浜娘」を復活させようというのだ。

従来ならば考えられなかったことだ。同業者はライバルだ。蔵での酒造りにノウハウがあり、人に見せるのはもちろん、ましてや貸すようなことはありえなかった。

だが、この時は違っていた。比較的被害が軽微だった盛岡では、何とか復興に苦しみながら取り組む沿岸部の人たちの力になりたいと思っている人は少なくなかった。実際に酒蔵を訪ねて歩くと、確かに誰もが力になりたいと言ってくれた。

だが、古館さんの望みはかなえられなかった。自分たちの酒を造る以上、仕込みから仕上げまですべて自分たちで行いたい。だが、蔵主たちが考えていたのは、蔵は貸しても造るのはあくまで自分たち——OEM（注）としての生産だった。蔵には長年、そこで酒を造り続けてきた職人——杜氏がおり、独自の技術やしきたりがある。おいそれと他人を蔵には入れるわけにはいかなかった。

無理な願いだということはわかっていた。自分たちだって立場が変わればそうするだろう。だが、古館さんは歩き続け、頭を下げ続けた。5件目に回った桜顔酒造が引き受けてくれることになった。

業界の常識やしきたりに抵触しつつ酒造りをするに、古館さんは相当、気を遣ったようだ。

「下働きからやらせて欲しいとお願いしました」

社長としてのプライドは捨てた。10月末から始めた酒造りでは、早朝から始まる作業の最初に蔵に入り、1日の仕事が終わった後は、後片付けや掃除を引き受けた。杜氏には酒造りについて「一から教えて欲しい」とあくまでその蔵の技術を尊重した。

「実際、そこにはウチのような小さなところにはない設備があり、環境は整っていました。機械化は進んでいましたがそれは量のためではなく、ちゃんと人の手をかけるところはかけていました。高品質型の清酒を造る蔵だったんです」

赤の他人と顔を合わせることで最初は緊張した空気が漂っていた蔵内だが、ひと月ほど経つと和やかなものになっていったという。休憩時間にはお互い冗談を言い合い、笑い声もあがるようになった。

清酒の品質は技術だけでは決まらないという。何人も人間が役割を分担して造る以上、1人ひとりの人の間の連携や全体の雰囲気は酒のできに大きく影響する。

12月15日、ついに清酒「浜娘」の販売が実現した。純米酒だ。設備や水が違うため、微妙に味は違う。だが、「生のフレッシュさと麴の香り、飲んだ時にはガツっとくる味わい、飲みがいのある酒」ができあがった。かつてのイメージそのままに「ガツラうまい酒」として売り出した。

販売目標は1万5,994本にした。被災前の大槌町の人口数だ。町民ひとりひとりに浜娘を届けるつもりで作った。

「浜娘」は盛岡や大槌ではもちろん、いわて生協の店舗を通じて県内で、また、東北サンネット事業連合、コープネット事業連合を通じて東北全域、関東で販売された。販売目標の1万5,994本

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県大槌町：赤武酒造株式会社

を売り切ったのは、7カ月後の2012年7月23日だ。

2012年秋、新しい酒蔵と工場新設のめどがついた。被災した中小企業がいくつかまとまって申請するグループ補助金を利用したのだ。現在の仮工場である、盛岡市新事業創出センターのすぐそばの土地に建てる。

施設や設備の復旧に4分の3まで国と県が出してくれるが、残りの4分の1は自己資金として出さなければならない。銀行は被災企業を応援するというものの、担保の確保などやはり条件は厳しい。古館さんは、この間、資金の調達に駆け回り、残り4分の1についてもやっとめどをつけた。

新工場は、酒蔵とできた酒を瓶にまで詰める工場をかねた施設で、生産能力は大槌の時の1.5倍ほどの見込みだ。一升瓶で8万本ほどに相当するという。今度こそ正真正銘、自分たちの蔵ができた。思う存分、清酒造に打ち込める。仮事務所で続けているリキュールの生産も、新工場にラインを作って集積する予定だ。

「これまでは先祖から受け継いだものを無くしたくない。“守る”っていう発想でした。でも、今は何もかも失って守るものがなくなった。ある意味、楽になったかもしれない。割り切りがついたというか、吹っ切れたというか、あきらめざるをえないというか（笑）。とにかく初代になったつもりで思い切ってできる、ということです」

資金集めに苦労した後も、建築資材が高騰し、職人も不足するなど胃の痛む日は続いた。だが、それも乗り越え、新しい蔵と工場は2013年6月にスタートする。

今も背負う返済の重さはズシリと感じているが、古館さんは震災を経験したからここまでできたとも思っている。

以前ならばひたすら清酒造だけにこだわった。だが、震災後、リキュールをはじめ、新しい商品や事業展開に頭を巡らるようになった。ある意味、吹っ切れた結果だった。

リキュールについては2011年8月に発売した3アイテムのほか、その後、アイテムを追加し、現在、全部で7種類を販売している。

岩手県産りんごを100%使用した「リカースイーツ いわて完熟りんご」や盛岡市の紹介で地元のアロニアを使った新規商品の「リカースイーツ いわてアロニア」。後者は、アントシアニン、ポリフェノールが豊富だ。他にも岩手県遠野市のトマトとりんごを使った「リカースイーツ 遠野フレッシュトマト」「リカースイーツ 遠野完熟りんご」など、いずれも地元の味を大事にした。

大槌の水の商品化もしたいと考えている。大槌で清酒造を続けられたのも、そこで湧く水を利用できたからだったが、現地での清酒造の再開のめどはまだ立っていない。だが、井戸から水を汲んで盛岡へ運べば、そこでパッケージして製品化はできるだろう。災害を経験したことで水の大切さはいやというほどわかった。水を全面に大槌そのものを全国に知らせていきたいという願いもある。同じように豆腐や蕎麦の商品化も考えている。

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県大槌町：赤武酒造株式会社

#### ◆いつかもう一度、大槌で

被災して自分は大きく変わった。この間もいろいろなところへ出向き、いろいろな人に会えた。社長を務めながらも営業は苦手だったが、今は人と話をすることが嫌いではなくなったと古館さんは言う。

「自分が一生懸命やってるんだから、会社が今回っている。以前はそう思っていたのですが、今はそんな考えは一切ありません。人の温かさをもつごく感じました。みんなに助けられながら来たんだなっていう実感が湧きました」

前は「欲」が強く、それが大事だと思っていた。だが、今はそれがつまらなく、意味のないことに思える。身近にあるものが大切と思えるようになった。

もっと変わりたい、強くなりたい、変わらなければと思っている。被災は大きなマイナスだが、それで消費者が容赦してくれるわけではない。もっともっと変わり、品質も何もかも満足してくれるものを作って商売をしていかなければならない。

昔のまま、同じ事をしていても、マイナスは乗り越えられない。毎日毎日、何か変わろう変えようと自分に言い続けている。

10年後に大槌へ帰り、そこで酒蔵と工場を建てるのが夢だ。今はまだ町の復興計画が定まらず、以前の場所に工場を建てても、いずれは取り壊さなければならなくなるという。だが、10年後ならば可能だろう。辛抱しなければならないが、それを苦痛と思うのではなく、生きがいとして楽しみながら仕事をしたいという。

2012年冬、古館さんは1年前と同じように桜顔酒造の蔵を借りて再生2年目の「浜娘」を作った。

「(2011年冬は)運よく造れて、造ることの喜びを本当に感じました。再認識しました。やっぱり私は酒屋です。『浜娘』をどうにかしていきたい。うちには本当の娘が2人いますが、3人目の娘と思って育てて行きますよ。今年で2歳。来年も再来年も3歳4歳と続けて20歳ぐらいまでは手をかけたい。本当の娘に20歳まで手をかけたら怒られちゃうけど、酒なら怒らないからね(笑)」

知人から、いつでも笑っていると助言を受けた。辛い時に辛い顔をしていても誰もよって来ない。身体だって動かなくなる。笑えば身体は動き出す。笑いながら必ずもう一度、大槌に戻る。

注) OEM：発注元企業のブランドで販売される製品を製造すること。